

台湾に田代安定の資料を訪ねて — 幻の旧慣調査報告書の出現 —

三木 健*

台湾大学の旧友教授からの第一報

「田代安定の新しい資料が見つかったよ。総統選挙でも取材しながら、一度見に来ないか」。旧友の台湾大学教授の呉密察さんから、そんな連絡をもらったのは、2004年3月中旬のことだった。あいにく私は仕事の都合で動けなかったが、「5月の連休に行くから」と返事をした。

呉さんは台湾近代史が専攻で、彼が東京大学大学院に留学していた20年も前からの友人だ。「台湾人の台湾」を主張する民進党の熱心な支持者で、4年前、陳水扁が総統に就任したあと、文化政策を担当する文化建設委員会の幹部として出向している。副大臣級で閣議にも出席しているという。

その彼から「田代安定の新しい資料が見つかった」との報を聞いたとき、私は「もしや、あの資料では?」と思った。それは田代が1885（明治18）年7月から翌年4月にかけて、およそ10ヵ月間、八重山各地を巡って旧慣調査をしたときの報告書である。田代はこのときの調査をもとに、明治政府に「八重山群島急務意見書」や「八重山物産繁殖之目途」といった意見書を提出しているが、そのもとになった報告書およそ50冊の行方が杳としてわかっていなかった。

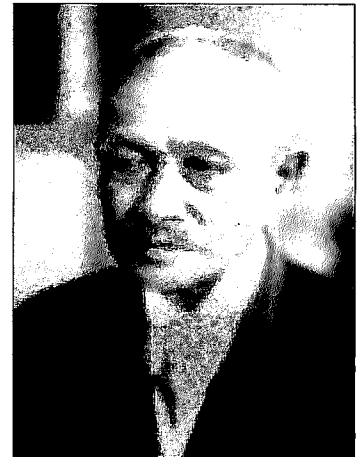
田代はこの八重山調査のあと、1894（明治27）年にも帝国大学取調委員の資格で訪れているが、翌年には日清戦争で日本が占領した台湾に渡る。総督府殖産局から台湾南部の恒春熱帯植物殖育場の創設に当たり、10年も勤務、人生後半の30年を台湾で送っている。

そんなことから田代の八重山調査報告書がもしあるとすれば、台湾をおいて他にない、と想定していた。そして呉さんに何か情報があれば教えてほしい、とかねて頼んでおいたのである。数年前にも田代の関係資料が出てきたというので見に行ったが、そのときは田代が持っていた蔵書類であった。

そのとき呉さんに案内されて、旧台北帝大時代からの書庫に入り、その蔵書を見せてもらったが、天井の低い書庫には、うっすらとほこりをかぶったままの日本文字の図書がぎっしりと並んでいた。「日本語が読める人がだんだん少なくなってねえ」と呉さんは言ったものだ。

数年前、台湾大学図書館の新館が建設され、日本時代からのこれらの図書も新館に移転した。私はそのときも田代のものが出てこないか期待したが、呉さんからは何の連絡もなかった。

それが今回の情報である。私はあえてどんな資料が出てきたのか、詳しく聞くことをしなかった。しかし、私は直感的に間違いなくあの資料だ、と思った。確たる根拠があるわけでもなかったが「あとは行っての楽しみ」と私は高雄経由の定期航路「飛龍」に乗って海路出発した。



田代安定（1857—1928）

400点余の調査資料

5月3日に台湾大学図書館を訪ねたとき、私はノンフィクションライターの柳本通彦さんを誘った。彼は1987年から台北に家族と住み、台湾を中心とするレポートを発信し続けているライターであり、ジャーナリストだ。著書に『台湾・霧社に生きる』や『台湾革命』などがある。『台湾革命』は国民党独裁から民進党に変わった台湾の現代史を、台湾で生活する視点で書いたすぐれたルポである。

*沖縄大学地域研究所 特別研究員、沖縄・八重山文化研究会会員

最近、柳本さんは日本人で台湾研究者の伊能嘉矩らが灯した「台湾学」について関心を抱き、その最初に位置する田代安定についても、調査を始めている。2004年1月に那覇に訪ねてきたとき、私もお会いして田代について語ったものだ。そんなことから、新しい資料はきっと柳本さんにとっても、有益に違いないと思うからだ。

私たち二人は呉密察さんの黒塗りの車に迎えられ、レンガ造りの台湾大学図書館の貴重書を収めた特蔵室を訪ねた。図書館長の項潔さんや特蔵書室の洪淑芬さん、李慈媛さんらに迎えられ、書棚に整理されたばかりの田代の資料に“面会”した。二間ほどの幅のある書架に、平積みされた資料が並べられてある。李さんがそれを取り出し、テーブルに並べた。項館長から、つい2、3日前に仕上がったというリストも渡された。

リストは図書（刊本）類（30件）、台湾関係（82件）、手稿雑類（35件）、南洋関係（29件）、日本関係（87件）、植物関係（85件）、日記や取材ノート関係（95件）に分類されている。このうちの日本関係を見て、私は思わず「これだ」と声を上げた。予想通り、これは田代が1885年（明治18）年から翌年にかけて、八重山調査を10ヵ月にわたり行ったときの報告書や1894（明治27）年の調査報告書である。

この中で最も多いのが、八重山の各村々の「巡検統計誌」と称する報告書である。しかし、これは田代が書いたものではなく、各村々の役所が提出したものである。いずれもあて先が「帝国大学調査委員・田代安定殿」になっている。村ごとに戸主の実名が記され、その下で家族が何人いるとか、その他の記事が掲載されている。

そして薄冊の表紙には「第〇〇冊」という表示が打たれている。ちなみに「西表島管内西表島南風見巡検統計誌」には「第卅九冊」という番号が打たれている。いただいたリストから「巡検統計誌」だけを拾い上げてみると、真栄里村、野底村、平久保村、竹富島、石垣島、南風見村、千立村、崎山村、鹿川村、新城島、下地村、同上地村、宮良村、与那国島、成屋村、平得村、波照間島、崎枝村、その他石垣島、八重山島とあり、およそ20冊余にのぼっている。また、いくつかの村については墨絵の見取り図や家屋の正面図などもある。

田代は晩年に「駐台三十年自叙誌」という沖縄調査から台湾に至る自らの経緯をつづった文章を残しているが、その中で八重山調査報告書のことを次のように書いている。

「復命書三十八冊（内各村細部統計書二十冊余）民家各戸ノ細別区画図、各島ノ測量図、同拓用著名原野ノ実測図ヲ添へ農商務省ト内務省ニ各1組ツツヲ呈出ス」

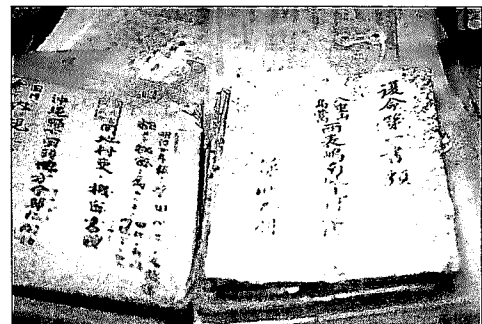
上の一文の丸かっこ内の「各村細部統計書二十冊余」と今回のリストにのった現物を照合すると、ほぼその数字が一致する。

沖縄近代史の貴重な資料

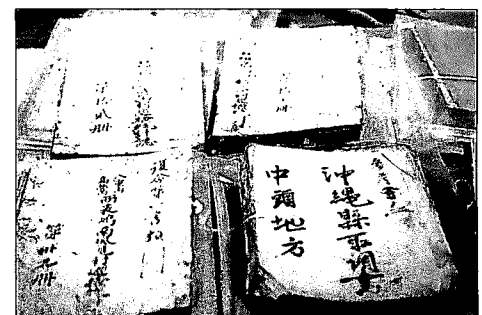
田代安定は十ヵ月に及ぶ旧慣調査を踏まえ、いくつかの復命書を明治政府要路に出している。先の「駐台三十年自



田代の資料を見る（左から）項潔館長、柳本通彦氏、呉密察教授＝台湾大学図書館（三木健撮影）



田代安定が調査した復命報告書の一部。「八重山管内西表島南風見巡検統計誌第卅九冊」の文字が見える。



新たに発見された田代收集の調査報告
＝台湾大学図書館

叙誌」にある「復命書三十八冊（内各村細部統計書二十冊余）」からすると、十数件の復命書を出していることになる。

今回発見された資料の中にも、これまでに知られている「八重山群島急務意見書」などの他「沖縄県下八重山島御料地設置上ノ件」（二冊）や「八重山島創業意見諸論」など新たな意見書が散見される。田代の復命書については、私もかつて1973年に「八重山近代史の一考察」「田代安定と近代八重山」（いずれも『八重山近代民衆史』1980年、三一書房刊所収）などで論じたことがあるが、今回新しく見つかった復命書も含め、新たな検証が必要かもしれない。

これも「駐台三十年自叙誌」に出てくるが、田代は八重山の人口三万人を将来三十万人にするべく、漁業や糖業などさまざまな「一種ノ植民政策」（田代の言葉）を提言したのである。

しかし、旧慣温存政策を基本としていた明治政府の取り上げるところとならず、そのうち日清戦争で日本が台湾を領有するに及んで、明治政府の関心も台湾に移っていく。挫折した田代は、やむなく心機一転、台湾に活路を求めて渡った。そして渡台後は、専門の植物学者として熱帯植物の研究に後半生をささげることになるのである。

それにしても、これだけの資料がどうしてこれまで発見されなかったのか。項館長によると、発見された資料は旧図書館の書庫ではなく、別館の倉庫であったという。めったに開けることのなかったこの倉庫の片隅から何十箱かに詰められた資料が出てきたのだ。

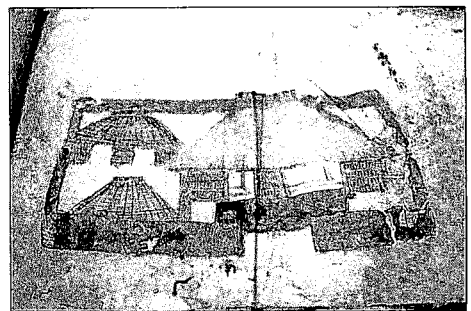
開けて見ると、日本文の資料なので、呉教授に見てもらったところ、田代安定のものであることが判明したというわけだ。空になった資料箱が別室に残されているというので、それを見せてもらった。木箱の上から布が張ってある立派なものだった。これは私の推測だが、田代の鹿児島での植物学の教え子である松崎直枝らが田代の死後に整理・保管したものではないかと思う。

というのは、田代は1928（昭和3）年3月に帰省中の鹿児島で亡くなったが、資料の整理にあたったのが、松崎であったからだ。とすれば、実に76年ぶりに眠りから目覚めたことになる。

それにしても田代が調査して残した沖縄関係資料は、沖縄近代史を知る貴重な資料として残された。呉教授は沖縄の公的機関と共同で修復し、活用していく方法はないものかと提言。項館長は昨年、沖縄県公文書館を訪れたことから、協力の糸口がないものかと話していた。一日も早く利活用ができることをお願いして、図書館を後にした。

その後、私と柳本さんは、台北の林業試験場を訪ねた。田代が台湾に渡ってから長くかかわった機関である。日本語が達者な客員研究員の林淵霖さんは「田代は忘れられた日本人だね」と言って、私に一冊の本をプレゼントしてくれた。『被遺忘的日籍台湾植物学者』（呉永華著）という本だ。「忘れられた日本人台湾植物学者」とでもいうのであろう。その中に田代が取り上げられ「熱帯植物研究の創始者」として紹介されていた。

同書には田代安定を紹介した文献として『伝統と現代』25号に、私が書いた日本フォークロア先駆者として「田代安定」の論文も紹介されているが、思えば30数年も私は、その行方不明の資料を探し求めていたのだ。



田代が書いた黒島の民家のスケッチ



廃村となった石垣島の盛山村の見取図

同試験場研究委員の潘富俊さんは、田代が調査した熱帯植物のデータは、100年たった今も生きていと力説していた。試験場に隣接した台北植物園には、田代が命名した植物の名とともに、田代の事跡が紹介されたパネルが設置されている。

歴史に埋もれた田代安定

戦前、台北市内には、新渡戸稲造（当時、総督府殖産局長）の揮毫になる「田代安定翁」と書かれた一丈余の功績記念碑が建っていた。その裏面には「八重山諸島調査報文凡五十余巻」の功績が刻まれていたという。私は碑が元あった場所を、柳本さんに案内してもらった。

そこは今は森林公園になっている。もともとは日本人墓地であったが、戦後、大陸からやってきた難民同様の兵隊たちが住む所もなく、そこにスラムを築いた。墓石が敷きならされ、家の台座になったが、どうやら田代の碑も、そのとき取り壊されたらしい。

1997年3月、時の陳水扁台北市長の指示で、このスラムが強制撤去されたとき、かつての日本人墓地が姿を現した。なんと鳥居まで出てきた。だが、田代の碑は見つからなかった。田代もまた大きな歴史の渦に呑み込まれたのである。

その夜、屋台で柳本さんと夕食をしているとき、柳本さんが言った。「それにしても、あれだけの仕事をした田代が、なぜ『駐台三十年自叙誌』で自分の人生に不満をもらしたのでしょね」

私にもよくわからない。田代の残した膨大な資料が、やがてそのなぞを解き明かしてくれるだろう。そのためにも、台湾大学図書館と沖縄のしかるべき機関による協力で、これらの資料が一日も早く利用できることを期待したい。



戦前、台北市内の日本人墓地にあった「田代安定翁」の記念碑

追記

その後、沖縄県公文書館（山田義人館長）では、2004年度の沖縄関係資料調査事業として、2005年3月8日から同月11日まで公文書管理部の大城真幸資料第二課長と太田健主任専門員の二人を派遣し、国立台湾大学図書館の項潔館長、呉密察教授らと会い、田代安定関係収蔵資料を調査した。沖縄県公文書館では、今後同図書館と協力しながら複製本の作製などにあたりたい考えである。（2005年4月30日）